世代間比較における音楽受容に関する研究

:《さんぽ》でさんぽ

Investigation of Music Perception among Generations

: Time your steps to “Sanpo”

髙橋麻里乃*，鈴木慎一朗**

TAKAHASHI Marino, SUZUKI Shinichiro

(*地域教育学科卒業生、**准教授・学習科学講座)

キーワード：世代間　generations，音楽受容　music perception，《さんぽ》　“Sanpo”

はじめに

世の中には数えきれないほどの音楽が存在する。その中には、誰もが１度は耳にしたことのある音楽もあるのではないか。１つにジブリ映画『となりのトトロ』のオープニングテーマ曲である、中川李枝子作詞、久石譲作曲《さんぽ》が挙げられるだろう。大森由美子は「スタジオ・ジブリのアニメーション映画『となりのトトロ』の中で用いられる《さんぽ》は幼稚園実習のアンケートでも大人気の曲であった」と考察している[1]。さらに筆者が教育実習で伺った幼稚園でも《さんぽ》が流されていたことなどから、《さんぽ》は幼児に親しみのあるものだと考えられる。また、《さんぽ》のように誰もが知っている曲であるということは、世代を越えて愛されているのではないかと予想される。では、各世代において《さんぽ》がどのように受容されているのだろうか。

多田千尋は、少子高齢化や核家族化、地域社会の希薄化が生じており、日常生活の中で行われる世代間交流の機会は少ないことを問題視する[2]。だからこそ、本調査では世代間比較を行うこととした。なお、草野篤子は「世代間交流とは、子ども、青年、中年世代・高齢者がお互いに自分達の持っている能力や技術を出し合って、自分自身の向上と、自分の周りの人々や社会に役に立つような健全な地域づくりを実践する活動で、一人一人が活動の主役となることである」と定義する[3]。

一方、大蔵康義は楽曲聴取後の感情変化についての検証を行っている[4]。映画『となりのトトロ』の楽曲である、《風の通り道》は、「懐かしい気分にかった」の１位、《となりのトトロ》は「優しい気分になった」の１位と首位を占め、感情の変化に強い影響を与えていることが明らかにされた[5]。残念ながら、《さんぽ》が取り上げられていないが、《さんぽ》から連想される「散歩」、すなわち「歩く」という身体表現を《さんぽ》に合わせて行ったとき、どのような気持ちの変化が起こるのだろうか。

そこで、本稿では《さんぽ》を用い、音楽受容について世代間での共通点や相違点を探ることを目的とし、さらに、《さんぽ》に合わせて「歩く」という身体表現を取り入れ、その様子と身体表現後の気持ちの変化を世代間比較することで、各世代における受容の仕方の実態について明らかにしていきたい。

１．《さんぽ》を用いての世代間比較

（１）調査の概要

ここでは、《さんぽ》の受け入れ方や身体表現、身体表現後の気持ちの変化について、幼児、児童、中学生、大学生、大人の順に各世代について調査し、最後に世代間比較を行う。

まず、調査の目的、対象、調査内容について述べる。

１）目的

本調査では《さんぽ》を用い、《さんぽ》の受け入れ方、《さんぽ》に合わせて「歩く」身体表現の様子、身体表現後の気持ちの変化の実態について、世代ごと明らかにしていく。さらに、それらを世代間比較することで、共通点や相違点を探っていく。

２）対象

本調査では、幼児、児童、中学生、大学生、大人の調査を行う。対象は、鳥取大学附属幼稚園５歳児、鳥取大学附属小学校１年生、鳥取大学附属中学校２年生、鳥取大学の学生、教員免許状更新講習受講生とした。

３）調査内容

質問紙による調査と身体表現の観察を行った。

質問紙は、小学生、中学生、大学生、大人で異なるものとした。音源は「原作・監督 宮崎駿，音楽 久石譲『となりのトトロ・ドラマ編』徳間ジャパンコミュニケーションズ、1996年、ＴＫＣＡ－７１０２８，ＣＤ」を使用した。《さんぽ》（前奏から１番まで）を流し、主として《さんぽ》の受け入れ方（好き、嫌い）、身体表現後の気分の変化について問うた。質問紙については 2014 年７月８日に鳥取大学の学生を対象にプリテストを実施し、内容の吟味を行っている。なお、幼児は記入式の質問紙ではなく、筆者が製作したカードを用い、筆者による口頭での質問により、受け入れ方（好き、嫌い）、身体表現後の気分の変化を尋ねる調査を行った。

身体表現による調査では《さんぽ》（前奏から１番まで）に合わせて自由に歩く様子を観察した。ビデオカメラを実施場所に２台設置し、後日視聴し筆者により観察メモを作成した。

以下、紙幅の関係上、幼児の調査の状況について取り上げる。

（２）幼児を対象とした《さんぽ》を用いた調査

ここでは「幼児を対象とした《さんぽ》を用いた調査」の調査対象者、調査方法、口頭試問の内容、調査期間・場所について記し、結果及び考察を述べる。

１）調査対象者

鳥取大学附属幼稚園５歳児　21 人（うち１人は身体表現からの途中参加）

２）調査方法

はじめに、１人に２枚ずつ、同じ数字の書かれたカードを配った。５歳児は普段の園生活において、青、緑の２グループに別れていることを伺っていたことから、便宜上、幼児のグループに合わせ、青の１～13 のカード、緑の１～８のカードとした。その後、《さんぽ》（前奏から１番まで）を流し、《さんぽ》の好き嫌いについてあてはまる箱にカードを１枚入れてもらった。次に、《さんぽ》（前奏から１番まで）に合わせ、身体表現をしてもらった。身体表現についての教示は「今度は《さんぽ》の音楽に合わせて好きなように歩くよ。２つ約束があります。歩くとき、カードは無くさないようにもっておいてね。音楽が止まったら、その場所で座ってね。」である。最後に、気分の変化についてあてはまる箱にカードを１枚入れてもらった。

３）口頭質問の内容

①《さんぽ》が好きであるか嫌いであるかについて

教示は「《さんぽ》の音楽が好きなお友だちは赤い箱に、きらいなお友だちはピンクの箱に１枚だけカードを入れてね。正解や間違いはないから、自分の思ったほうに入れてね」である。

②《さんぽ》の音楽に合わせて歩いた後、気分が高まったか沈んだかについて

教示は「《さんぽ》の音楽に合わせて歩いて、楽しくなったり、うきうきしたお友だちは赤い箱に、悲しくなったり嫌な気持ちになったお友だちはピンクの箱にカードを入れてね」である。

４）調査期間・場所

2014（平成 26）年 12 月４日（木）

鳥取大学附属幼稚園遊戯室

５）結果及び考察

図１は幼児における《さんぽ》の受け入れ方についての割合を示している。

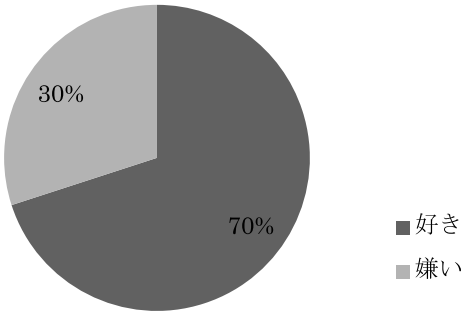

図１　《さんぽ》の受け入れ方

この結果より、《さんぽ》が好きな幼児は 20 人中 14 人で、全体の 70％である。嫌いな幼児は 20 人中６人で、全体の 30％である。

幼児を対象に鳥取大学附属幼稚園遊戯室で行った《さんぽ》に合わせての身体表現の調査の様子は以下の通りである。

曲の開始時は、筆者からの質問を受けている時に並んでいた隊形（１列２～５人で縦５列）である。曲が始まると、その場で拍に合わせて足踏みを始める対象者が６人ほど見られる。そのまま５人が集団で曲の速さに合わせて歩き出している。そのうち２人は拍に合わせ腕を大きく振りながら歩いている。前奏７小節目に入る頃には全員が各々の好きな方向へ歩き始めている。手を引っ張り曲より速く走っているペアが１組、他に、手を繋ぎ歩いたり、前の対象者の肩を持って歩いたりしている２、３人のグループが４組見られる。腕を大きく振り、拍に合わせながら１人で歩いている対象者がいる。走っておいかけっこをしている様子も２人ほど見られる。遊戯室内を移動している対象者が大半だが、最初に居た位置で拍に合わせて足踏みをしている対象者が５人いる。曲の速さに合わせてスキップをしている対象者が２人いる。曲の後半になると口頭での質問を行った位置で拍に合わせて足踏みをする対象者が８人ほどおり、全体がそこへ集まってきている。全体を通して笑顔の対象者が大半であるが、３、４人表情に変化が無く、黙々と歩いている対象者も見られる。泣いている対象者はいない。

（2014 年 12 月４日　観察メモ）

観察メモより、拍を感じ取り、足踏みをしたり歩いたりしている幼児が半数近く居たことがわかる。そのうち、終始拍に合わせて歩いていた幼児は４人であった。また、全体的傾向として、足並みが拍には合っていなくても、曲の速さに合わせて歩いたりスキップをしたりして、身体表現を行っていた。また、曲の速さより速く走っている様子も見受けられた。身体表現の種類は、歩く、走る、スキップであった。曲全体を通して、ほとんどの幼児が笑顔であり雰囲気は穏やかで楽しそうに身体表現をしていた。

図２は、幼児における身体表現後の気持ちの変化についての割合を示している。

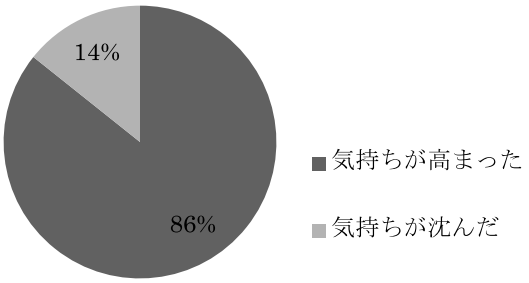

図２　身体表現後の気持ちの変化

この結果より、気持ちが高まった幼児は 21 人中 18 人で、全体の 86%である。気持ちが沈んだ幼児は 21 人中３人で、全体の 14%である。

表１は、幼児における《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係についてクロス集計したものである。なお、集計の際には Excel を用いた。また、身体表現から途中参加の幼児１名については集計に含めていない。

《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係の相関係数を算出したところ.336122782 と弱い正の相関関係がみられる。

表１　《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係

単位：人（%）

	身体表現後の気持ちの変化		
受け入れ方	高まった	沈んだ	合計
好き	13(92.86)	1(7.14)	14(100.00)
嫌い	4(66.67)	2(33.33)	6(100.00)
合計	17(85.00)	3(15.00)	20(100.00)

以上の結果より、幼児を対象とした《さんぽ》を用いた調査について考察する。

《さんぽ》の受け入れ方について「好き」な幼児は 70%であり、幼児において広く受け入れられている曲であることが言える。

身体表現では、半数の幼児が自然と拍を感じ取っていたことから、《さんぽ》は幼児においても拍を感じ取ることのできる曲であることが言える。また、筆者が口頭で「《さんぽ》の音楽に合わせて好きなように歩くよ」と促したのに対し、歩くだけでなく、スキップをしたり走ったりしている様子も見られた。このことから、《さんぽ》は歩くという動きだけにとどまらず、他の身体表現においても可能であることが言えるだろう。全体的な傾向として、笑顔で身体表現を行っていた。

身体表現後の気持ちの変化で「気持ちが高まった」と示した幼児は 86%である。《さんぽ》を用いて歩くことは、幼児の気持ちを高める効果があると考えられる。

また、《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係より、《さんぽ》が「好き」であり身体表現後「気持ちが高まった」幼児は 92.86%と非常に高い。一方、《さんぽ》が「嫌い」であり身体表現後「気持ちが高まった」幼児は 66.67%と半数を超えている。これらのことより、《さんぽ》を用いて歩くという身体表現は、《さんぽ》が「好き」な幼児はもちろん、「嫌い」な幼児においても、気持ちを高めるものだと言えるだろう。

２．調査結果の考察

ここでは、調査結果を世代間比較していきたい。

（１）《さんぽ》の受け入れ方、身体表現、身体表現後の気持ちの変化における世代間比較

各世代の調査の結果の中から、「《さんぽ》の受け入れ方について、好き、どちらかというと好きの割合」、「身体表現における拍、ステップ、表情」、「身体表現後の気持ちの変化について、気持ちが高まった、少し気持ちが高まったの割合」を一覧にしたものが表２である。

表２　《さんぽ》の受け入れ方、身体表現、身体表現後の気持ちの変化における世代間比較

	幼児	児童	中学生	大学生	大人
受け入れ方	70%	71%	55%	87%	95%
身体表現（拍）	・その場で拍に合わせて足踏みを始める（６人・前奏） ・拍に合わせ腕を大きく振りながら歩いている（２人・前奏） ・拍に合わせ腕を大きく振りながら歩いている（１人・１番） ・拍に合わせて足踏みをしている（８人・１番）	・横に並び、拍に合わせ腕を振りながら歩いている（２人・前奏） ・手を繋ぎ、メロディーを口ずさみながら、それに合わせ歩いている（３人・前奏）	・足並みが拍には合っていないが、曲の速さに合わせて歩いている（３人・１番） ・全体的傾向として、曲の速さより歩く速度が遅い	・拍に合わせ弾むように腕を振りながら歩いている（１人・１番） ・全体的傾向として、曲の速さより歩く速度が遅い	・全体で反時計回りに円を描くように拍に合わせて行進のような形で歩いる（全員・前奏７小節目から最後まで）
身体表現（ステップ）	・歩く（手を繋いで、前の人の肩を持って） ・走る ・スキップ	・歩く（手を繋いで） ・走る ・スキップ ・回転	・歩く（腕を組んで、じゃんけん列車）	・歩く	・歩く
身体表現（表情）	・笑顔（大半） ・黙々と（３、４人）	・笑顔	・笑顔 ・照れ笑い ・固い（前半）	・笑顔（大半） ・戸惑い、冷淡（６人ほど）	・笑顔 ・固い（前奏）
身体表現後の気持ちの変化	86%	91%	70%	81%	90%

表２より、指摘できることを述べていく。

《さんぽ》の受け入れ方について、「好き」、「どちらかというと好き」の割合が幼児、児童、大学生、大人では70%を超えている。中学生においては55%であるが、「ふつう」が39%、「嫌い」、「どちらかというと嫌い」が６%であることを考慮すれば、《さんぽ》は幅広い世代から「好き」、「どちらかというと好き」と、好意的に受け入れられている曲であると言うことができる。

身体表現について、拍、ステップ、表情の３つの観点から考察していく。

はじめに拍について、中学生では拍に合わせて歩く様子は観察できなかった。しかし、幼児、児童、大学生、大人では拍に合わせて歩く様子を観察することができた。このことから、中学生においては、拍に合わせて歩くことができるにもかかわらず、恥ずかしさ等から拍に合わせて歩くことをしなかったのではないかと考えられる。また、中学生、大学生は全体的傾向として、曲の速さより歩く速度が遅かった。

次にステップについて、筆者が口頭で「《さんぽ》に合わせて自由に歩いてください」と促したこともあり、全ての世代で歩く様子が観察できた。また、幼児、児童においては走ったりスキップしたりする様子も観察できた。中学生においては、じゃんけん列車を始めていた。《さんぽ》の拍、速さに合っているもの合っていないものそれぞれであったが、《さんぽ》を聴きながら身体表現をすることで、歩くことにとどまらず、他の身体表現においても可能であることがわかった。本調査では歩き方を筆者からは指定せず、「自由に」と謳っていた。意図的に歩き方に条件を加えることで、さらに世代間での共通点、相違点など歩き方に広がりが見られたかもしれない。

最後に表情について、全ての世代でおおむね笑顔であった。しかし、特に中学生、大学生においては照れ笑いや戸惑いの表情も目立っていた。だが、全ての世代に共通していたのは、身体表現開始時よりも、身体表現終了時の方が笑顔である人数が増えていたことである。これは、《さんぽ》を聴きながら身体表現を行っている間に、緊張がほぐされていったからではないかと考えられる。

身体表現後の気持ちの変化について、「気持ちが高まった」、「少し気持ちが高まった」の割合が幼児、児童、大学生、大人では80%を超えており、中学生においては70%である。このことから、《さんぽ》を用いて身体表現を行うことは、幼児、児童、中学生、大学生、大人の全ての世代において、気持ちを高めると考察できる。

（２）《さんぽ》の受け入れ方についての主な理由における世代間比較

次に、《さんぽ》の受け入れ方について「好き、どちらかというと好き」、「嫌い、どちらかというと嫌い」の各世代において１位の理由について比較をする。なお、幼児には本質問は行っていないため、児童、中学生、大学生、大人について表３に示す。また、大学生、大人については「嫌い、どちら

かというと嫌い」を選択した対象者がいなかったため、「好き、どちらかというと好き」の理由についてのみ示す。

表３　各世代の《さんぽ》の受け入れ方についての主な理由

世　代	理　　由
児　童（好き）	《さんぽ》に対する思い出があるから
児　童（嫌い）	《さんぽ》に対する思い出があるから
中学生（好き）	音楽の側面から
中学生（嫌い）	音楽の側面から、気持ちが変化するから
大学生（好き）	映画『となりのトトロ』で使用されているから
大　人（好き）	音楽の側面から

表３より、指摘できることを述べていく。

《さんぽ》の受け入れ方についての主な理由は、各世代で様々である。しかし、児童、中学生においては、「好き、どちらかというと好き」、「嫌い、どちらかというと嫌い」の主な理由がそれぞれ共通していることがわかる。

また、児童では「《さんぽ》に対する思い出があるから」が主な理由であり、これは《さんぽ》の音楽的特徴とは直接の関係がないものである。対して、中学生、大人では「音楽の側面から」が主な理由であり、これは《さんぽ》の音楽的特徴に関係するものである。各世代の発達段階によって、このような相違点があったのではないかと考えられる。

（３）《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係における世代間比較

続いて、《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係について、世代間比較を行う。

はじめに、《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係の相関係数を各世代で比較する。表４に、各世代の《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係の相関係数を示す。

表　４　各世代の《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係の相関係数

世　代	相関係数	程　度
幼　児	.336122782	弱
児　童	.294895844	弱
中学生	.538517404	中
大学生	.417177435	中
大　人	.410435429	中

表４より、指摘できることを述べていく。

《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係について、幼児、児童、中学生、大学生、大人の全ての世代において、正の相関関係があることがわかる。

また、相関関係の程度は、幼児、児童においては弱い正の相関関係、中学生、大学生、大人においては中程度の正の相関関係である。このことから、世代が上がるにつれ相関の程度が高まるとも考えられるが、数値を見ると幼児「.336122782」、児童「.294895844」、中学生「.538517404」、大学生「.417177435」、大人「.410435429」と、順に上昇しているわけではないため、はっきりとは言えない。

次に、《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係についてのクロス集計より、各世代において人数分布が最大であった項目について比較を行う。表５に、《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係についてのクロス集計より人数が最大であった項目、人数、世代ごとの全体の人数に対する割合について示す。

表　５　各世代の《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係についてのクロス集計における人数最大項目

世　代	項　　目	人数（全体人数）	割　合
幼　児	好き―高まった	13 人（20 人）	65.0%
児　童	好き―高まった	26 人（68 人）	38.2%
中学生	どちらかというと好き―少し高まった	11 人（36 人）	30.6%
大学生	好き―高まった	14 人（48 人）	29.2%
大　人	好き―高まった	10 人（20 人）	50.0%

表５より、指摘できることを述べる。

幼児、児童、大学生、大人では、「《さんぽ》が好き」で「身体表現後、気持ちが高まった」対象者数が最大であったことがわかる。また、中学生では、「《さんぽ》がどちらかというと好き」で「身体表現後、少し気持ちが高まった」対象者数が最大であったことがわかる。このことから、《さんぽ》は全ての世代で好意的に受け入れられており、身体表現後、気持ちが上昇する対象者が多いと言える。

以上より、《さんぽ》は幼児、児童、中学生、大学生、大人と幅広い世代から、好意的に受け入れられている曲であると言うことができる。

《さんぽ》の受け入れ方の主な理由については、世代によって様々であるが、児童では音楽的特徴とは直接の関係の無

いものが、中学生、大人では音楽的特徴に関係するものがあげられていた。

身体表現について、歩く様子は世代によってさまざまであった。幼児、児童、大人では拍や速さに合わせて身体表現を行っている様子が見られた。しかし、中学生においては拍に合わせて歩く対象者はおらず、大学生においても１人と少なかった。また、幼児、児童においては走ったりスキップしたりする様子も見られた。全ての世代に共通していたのは、身体表現開始時よりも、身体表現終了時の方が笑顔である人数が増えていたことである。

加えて、身体表現後の気持ちの変化では「気持ちが高まった」、「少し気持ちが高まった」の割合が全ての世代で70%を超えていた。このことからも、《さんぽ》を用いた身体表現は、幼児、児童、中学生、大学生、大人の全ての世代において、気持ちを高めると考察できる。

さらに、《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係について、幼児、児童、中学生、大学生、大人の全ての世代において、正の相関関係があることが明らかになった。

《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係についてのクロス集計からも、幼児、児童、中学生、大学生、大人の全ての世代で《さんぽ》は好意的に受け入れられており、身体表現後、気持ちが上昇する対象者が多いことが言える。

おわりに

本稿では、《さんぽ》の受け入れ方、身体表現、身体表現後の気持ちの変化について、幼児、児童、中学生、大学生、大人を対象に調査を実施し、世代間比較を行った。

《さんぽ》の受け入れ方について、「好き」、「どちらかというと好き」の割合が幼児、児童、大学生、大人では70%を超えており、中学生においては 55%であったが、「ふつう」が39%、「嫌い」、「どちらかというと嫌い」が６%であることを考慮すれば、《さんぽ》は幅広い世代から「好き」、「どちらかというと好き」と、好意的に受け入れられている曲であると言えるだろう。《さんぽ》の受け入れ方の主な理由については、世代によって異なっていたが、児童では音楽的特徴とは直接の関係の無いものが、中学生、大人では音楽的特徴に関係するもがあげられていた。

身体表現について、歩く様子は世代によって様々であった。幼児、児童、大人では拍や速さに合わせて身体表現を行っている様子が見られた。しかし、中学生においては拍に合わせて歩く対象者はおらず、大学生においても１人と少なかった。また、幼児、児童においては走ったりスキップしたりする様子も見られた。全ての世代に共通していたのは、身体表現開始時よりも、身体表現終了時の方が笑顔である人数が増えていたことである。加えて、身体表現後の気持ちの変化では「気持ちが高まった」、「少し気持ちが高まった」の割合が全ての世代で 70%を超えていた。このことからも、《さんぽ》を用いた身体表現は、幼児、児童、中学生、大学生、大人の全ての世代において、気持ちを高めると考察できる。

さらに、《さんぽ》の受け入れ方と身体表現後の気持ちの変化の関係についてのクロス集計からも、幼児、児童、中学生、大学生、大人の全ての世代で《さんぽ》は好意的に受け入れられており、身体表現後、気持ちが上昇する対象者が多いことが明らかとなった。

ところで、世代間交流プログラムの内容の１つにアートや音楽関連があった。藤原は世代間交流プログラムの目指すべき目的および効果について「参加する高齢者と若者・子ども、さらには主催者あるいは支援者である職員やコーディネーターなど関与する者すべてに何らかの恩恵がもたらされることである」と述べている[6]。本調査結果により、《さんぽ》は全ての世代で好意的に受け入れられており、身体表現後の気持ちを高めるものであった。《さんぽ》は、身体表現を行う等の活動を通して「参加者の気持ちを高めることができる」という点で、世代間交流の場で用いることにふさわしい曲であると筆者は考える。

今後の課題

今後の課題として、以下の５点を挙げたい。

第一に、本稿では、幼児、児童、中学生、大学生、大人を対象とし調査を行ったが、高齢者を対象に調査及び研究を行う必要があると考えられる。少子高齢化の背景等から世代間交流において高齢者は重要な位置付けがされていた。では、高齢者は《さんぽ》をどのように受け入れているのだろうか。また、どのように身体表現を行い、身体表現後にどのような気持ちの変化が起こるのだろうか。高齢者を対象に調査を行うことで、高齢者における《さんぽ》の需要の仕方について明確にしていきたい。

第二に、本稿では対象とする大人を教員免許状更新講習受講生としたが、職業や職種に偏りが出ないよう対象者を募り、調査及び研究を行う必要があると考えられる。本調査の対象者は日常的に教育現場に関わっているため、職業柄、回答や身体表現に偏りがあったかもしれない。そのため、職業や職種に偏りのない対象者で調査を実施することで、より一般的な結果について、明確にしていきたい。

第三に、身体表現を実施する場所、使用する音源の時間設定についての検討が必要であると考えられる。本調査では、同一の場所で大学生（48 人）と大人（20 人）の身体表現を行った。そのため、大学生の自由記述に「狭くて歩きにくかったけど楽しかったです。」という回答も見られた。対象者数数に対して実施場所の広さが適当であるか吟味を行った上で調査を行い、対象者が「狭い」などの《さんぽ》と直接関係のないことで気持ちが変化しないよう努めたい。また、中学生の自由記述では「実際にこれを山の中でしてみたい。」、「音楽室だったのですごく楽しくなったとは言えないけれど、外に出て「さんぽ」を聞きながら歩いたら気持ちよさそうだなぁと思いました。」という回答があった。これを受け、実施場所

を屋内に限らず屋外についても検討し調査を行いたい。さらに、小学生の自由記述に「もうすこしあるきたくなった」、中学生の自由記述に「はじめは、あるけなかったけど少しづつあるけるようになった。」という回答があった。本調査では、《さんぽ》の前奏から１番のみで実施したが、今後は２番や３番まで使用し実施した場合の身体表現や気持ちの変化についても調査したい。

第四に、本稿では調査の実施前に対象者の緊張をほぐすようなアイスブレイクを行わなかったが、調査の実施前にアイスブレイクを行うことである。質問紙での調査のみならば支障はなかったかもしれない。しかしながら、身体表現による調査は、表現というだけに緊張していた対象者もいただろう。そこで、筆者と対象者、対象者同士で打ち解けることのできる場を設定し、対象者がリラックスした状態で調査を実施することで、より明確な結果を得られるようにしたい。

第五に、《さんぽ》を用いた世代間交流プログラムの試案を作成し、実施することである。本調査で得られた各世代の《さんぽ》の受け入れ方や身体表現、身体表現後の気持ちの変化の結果及び考察を踏まえ、子ども、青年、中年世代、高齢者の全ての世代が、互いに自分達の持っている能力や技術を出し合うことのできる世代間交流プログラムの試案を作成したい。さらには、実施する地域にも着目し、《さんぽ》を用いた世代間交流プログラムを通して、地域レベルなどの関与者を取り巻く広範囲に波及効果をもたらすことができるような世代間交流を目指し、実践していきたい。

これらの課題を踏まえ、今後は特に高齢者を中心とし、世代間比較における音楽受容についてさらに追及していきたい。

【謝辞】

本研究を行うにあたり、鳥取大学附属幼稚園、附属小学校、附属中学校ならびに教員免許状更新講習の受講生からの協力を得ました。ここに記して、感謝の意を表します。

【付記】

本稿は、2014（平成 26）年度鳥取大学地域学部卒業論文「世代間比較における音楽受容に関する研究:《さんぽ》でさんぽ」の一部である。また、本稿の一部を日本音楽教育学会中国四国地区例会（2015 年、於：岡山大学）において口頭発表を行った。

【注】

1 大森由美子「幼児の音楽表現活動に関する一考察：保育実習アンケートを通して」『東海学院大学短期大学部紀要』38 巻、2012 年、pp. 49-55。

2 多田千尋『遊びが育てる世代間交流：子どもとお年寄りをつなぐ』黎明書房、2002 年、pp. 10-12。

3 草野篤子「世代間交流の歴史」倉岡正高『地域を元気にする世代間交流』遊行社、2013 年、p. 11。

4 大蔵康義『人は音・音楽をどのように聴いているのか』国書刊行会、2010 年、p. 123

5 同書、p.129、p.132。

6 藤原佳典「世代間交流活動の効果」倉岡正高『地域を元気にする世代間交流』遊行社，2013 年，p. 39。